

第4回（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略検討会 議事要旨

日時	令和4年2月15日（火）13時30分～15時50分
会場	区役所4階 402・403 会議室
出席	11名（全員出席／内オンライン出席1名）
議題	（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略について （1）第3回検討会での意見対応について （2）（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略の素案（案）について （3）戦略の名称について

議事要旨

● 開会

資料説明（事務局より）

- （1）第3回検討会への意見対応について
- （2）（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略（素案）（案）について

- 資料1、資料2-1、資料2-2、資料2-3に基づき、（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略（素案）（案）について、第3回検討会での意見に基づき修正した内容等を中心に説明がされた。

意見概要（（仮称）千代田区ウォーカブルまちづくり戦略（素案）（案）について）

- 素案をもとに、区民や多くの方にウォーカブルについてのガイドラインが示されると考えている。また、区外の方にとっても参考にもなるため、デザイン・レイアウトについてしっかりデザイナーを入れてつくったほうがよい。皆さんに好感をもって積極的に参加していただく意味でも、デザインの力が必要だと考える。
- 戦略の内容はよく固まってきているが、それがしっかり区民・区外の方に伝わるかは課題であるとする。
- 2ページの目的について、QOLという形でまとめているが、QOLを千代田区としてどう受け止めるか。国交省では、ウォーカブルを都市の国際競争力やクリエイティブな力、イノベーションの創出等を都市に展開していくうえで大事としている。一方で、千代田区にもそういったものは大丸有地区等にあるが、それぞれの地域で特徴がある。そうすると、地域にブレイクダウンした目的や身近に感じられるウォーカブルな目的をどう表していくかを考え、資料編等で示すことを考えてもよいかもしれない。そして、ウォーカブルが千代田区にいる一人ひとりの力を発揮するのに大事だということが伝わると良い。
- 戦略の後に区民の皆さんとエリアごとに話し合っていくということを考えると、国が考えるウォーカブルの目的に引っ張られすぎず、区民目線で区民が主体になることがよいと考える。区民が主体となってQOLを考えてもらい、自分事となることが大事だと考える。
- P3のイメージについて、「エリア共通」ということが示されたのはよいと考える。
- ウォーカブルとは何か、QOLとは何かについて、全体の流れとは別に、この検討会で議論されてきたことをまとめてコラムとして差し込むと、ウォーカブルやQOLのイメージがしやすくなるのではないかと考える。資料編が充実し、データベース化してしまっているため、本編でイメージがかきたえられるものを入れられれば良いと考える。
- P3のイメージロードマップ的なものになると考えるが、これがどのくらいの時間軸で見ればよいのかが分からない。
- すぐできる取組みや、何年かかかる取組み、お金がかかる取組みなどが整理されるとよい。すぐできること等は、「いわれてみれば」となることもある。具体例について、時間軸でのジャンルで分けができると親切だと考える。

- P12 の実現への道筋などにおいて、短い時間軸でできることと、それを積み重ねて長い時間軸でできることの関係性を整理できるとよいと考える。目的に向けて、抜本的に変えようとする時間がかかるかもしれないけども、積み重ねとなるアクションはすぐできるかもしれないということを示せるとよい。
- 福祉的な視点や、ウォーカブルな要素の周辺についても配慮していくような記載があるとよい。具体的には方針 3 において非商業施設の話もあるが、福祉施設の事例も入れられるとよいと考える。
- P18 のパイロットプロジェクトの検討のイメージについて、ウォーカブルなまちづくりでは自動車優先だったものを変えていくという考えのほずである。幹線道路であっても様々な交通で目的地に行く流れの中、駅前が自動車優先の道路となっているため不自然である。また、自動車優先と示すこともどうかと考える。
- P18 のパイロットプロジェクトの検討のイメージが、現状の道路の役割を示しているのか、パイロットプロジェクトでこのような役割とするのかが分かりにくくなっているため、表現を整える必要がある。
- P7 の「回遊視点」のウォーカブルな要素に地域の歴史的資源・文化的資源が入っていないが、回遊として歴史・文化のまち歩きのようなものがあったもよいと考えている。日常的な生活の中での散歩や、訪れてみたい場所を巡るあり様がウォーカブルとしてあると考える。
- 歩行者天国の雑多なところなど、特色ある賑わいといったものも、そこに行きたくなるウォーカブルな要素になると考える。
- 日本のサブカルチャーのように、海外で評価を受けて、日本のすごい文化だったと認識したようなものがある。海外の視点や来訪者の視点をウォーカブルでどう受け止めるかも大事だと考える。また、千代田区の様々な特色をつないで見せる考え方も必要だと考える。
- 地域資源とはなにか。地域資源になるとみんな観光地をつくる話に聞こえてくる。歴史や名産品といったことも大事だが、今そこに生きている人のその人らしさが、そのまちらしさだと考える。自分ごとというのは自分が参加意識を持っているかどうかである。あるコンテンツに寄せるのは無理があり、ウォーカブルをとおして観光地を作りたいのか日常を作りたいのかはっきりさせるか、どちらであれば優先順位をつけるべきだと考える。ウォーカブルという概念の中に様々な要素があるが、全て混ざってしまうと自分ごとになっただけでいいと言いながら、区民が興味ないものだけになってしまうのではと感じている。コンテンツ以外のことに興味のある人にとっても自分ごとになるべきであり、それがウォーカブルだと考える。コンテンツの話をするのか普遍的な人間の幸せとは何かということに寄せるのかを整理する必要がある。
- 千代田区で暮らしている人たちがどうありたいかのために、どういうふうなまちづくりとして今回のチャレンジができるのかが前提にあると考える。そこを外さず最後まとめていきたい。
- 実際にウォーカブルなまちづくりを進めていく時に、様々な意見を言える場をつくって、何をしていくのかを決めていくのが大事であると考え。そこにつながるようにまとめておく必要がある。
- まちに対して関心のない人たちとの接点を、このウォーカブルでどうしていくのかというメッセージが示されているのかということが大事だと考える。例えばまちづくりビジョンがない地域を次どうしていくのかとか、何かそういったところでの場の持ち方とか、次のステップを意識できるように整理しておく必要がある。

ウォーカブルなまちづくりに関する事例報告

- 田中元子氏（株式会社グランドレベル代表取締役社長）より、ウォーカブルなまちづくりに関する取組み等の報告がされた。
- 中島委員長より、東京文化資源会議で検討しているトーキョートラムタウン構想の報告がされた。

ウォーカブルなまちづくりに関する意見交換

- 自分で気を付けられる自分と、周りに声を掛けられる自分、歩車分離はそういうのに頼らない、能力がないけど安全を守るということに振り切っている。千代田区に居る人を信じるようにできるとよいと考える。
- 富山のグランドプラザという広場がまさにそのような場所で、禁止事項が掲示されてないと聞いている。子どもが遊んでいる横で酒を飲んでいる人がいても、出てけとは言わず、そういうときに何をしているか聞いて、どういう場か気づいてもらうようにしていると聞いた。官民連携で管理人をおき、管理員が一生懸命やっていることが認められるような積み重ねが、コミュニティ醸成等につながるとよいと考える。
- どこでも居場所があるということが重要で、そのことは6万7千人のまちではなく、85万人のいるまちとして考えなければいけないと感じた。
- 事例にあったように、マンションをつくれればつくるほど人気を感じられなくなるというのは正に神田で起きている。千代田区における地区計画、住宅にインセンティブを与えていたところを、低層部に生活支援を呼ぶ地区計画に変えれば解決できるのか。都市計画で箱をつくれればそうなるのかどうかは、土地柄なのか、マーケットの力が必要なのか、行政はどこまでやるのが難しい。現実には志あるディベロッパー、都市計画と用途誘導とまちの経営をどうすればよいかを考えている。そういうものをここだけでなく、いろいろなもので整理する必要がある。
- やる気や善意でできることは僅かなので、それが継続されるには応援の力が必要である。マンションを建てる際に、経済的合理性で1階を壁にするようなことは当然である。都市計画に商業地域と住宅地域のようなわけができるのなら、1階づくり重点地域のようなものがあったとしても良いと考える。また、業態を絞らなくてももしつらえを歩行者がよく感じられるような、いいヒューマンスケールを誘導できるようなガイドラインが必要と考えている。
- 行政の都市計画でできることできないことと、民間だからできることできないことみたいなのが共有されてきて、ウォーカブルで橋渡しできそうかというところが今見えてきている。行政でもまちづくりは都市計画だけでは届かない課題があることにも気づいてきている。逆に都市計画でできるのではないかという期待が先行して、地域の方が裏切られた気持ちになっていることもある。公共空間の充実を双方からどうやったらできるかということが、本戦略の一番大事なステップだと考えている。
- お互いがウォーカブルで何かを与えられると考えていると何も始まらない。助成金とかお金をあげても目的と違う使われ方をすることがある。私はクーポン券のようなものが良いと考えている。たとえ1階がオープンカフェでコミュニティに寄与したらクーポン使えるとか。コペンハーゲンのオープンテラスの設置は免許制になっているが、公的な空間使えるということで、お店にもメリットありますし、行政としても観光資源として活用している面もある。そういう紐づけで双方のメリットを図ることが大事だと考えている。
- 大丸有での事例を紹介すると、地区計画で壁面後退区域が定められていて、当該区域内は運用基準により原則設置物は認められていないが、丸の内仲通りのアーバンテラスの区間については通りと一体的に活用することの意義を整理し、区が運用基準を改定し、店舗前面の壁面後退区域の活用が可能になっている。これにより、店舗に対しても前面が使えるというメッセージになり、店舗の店構えや賑わいが外の空間に向いてくる。そういう誘導が大事である。
- 区と連携して大丸有でやっていることがオール千代田で、特区の有無で関係なくできることが重要であるので、引き続き大丸有の取組みや実績について共有いただきたい。
- 新型コロナのテラス占用は、新型コロナウイルス感染症を受けての形となっているが、一定のガイドラインに沿った形であれば、特例を認めたり、手続きの簡易化を図ったりするようなものがあったとしてもよいと考える。新型コロナウイルス感染症の緊急事態でできたのだから、ウォーカブルを旗印に検討しても良いと考える。
- 制度にとらわれず、もっと円滑化するような進め方があったとしてもよいと考える。スピーディーな手続きに向けた進め方を整理するだけでも、そこに苦勞する人たちのストレスが解消できるのではないかと。

- 海外では、歩行者の数だけでなく経済的な動向も調べている。お店の人たちに歩きやすいだけでなく、儲かると言えば動くと考え。善意以上の目的やメリットを提示する必要がある。
- 丸の内ストリートパークでは、路面店舗の実績等を調べており、目の前の空間が広場になることの相乗効果で、昨対比・前月比の売り上げが上がったエビデンスもある。

資料説明（事務局より）

（3）戦略の名称について

- 資料3に基づき、戦略の名称について説明がされた。

意見概要（戦略の名称について）

- つながる都心は使わないのか。
- 主題にウォークブルが入るのも鉄則なのか。
- 「和」というのが予定調和というか空気を読んで結論までいくと感じてしまった。和の中に伝統的なコミュニティだけではない要素が伝わるようにできるとよい。
- 「歩いて出会う千代田の豊かさ」とかはどうか。歩けることが豊かであるということや、外に出てみようという誘いかけを伝えられるとよい。また、何かをつくるということで固定してしまわず、「千代田の豊かさってなーに」くらい抽象的な言葉にしたほうが、具体的な着地点を考えられるよりよいのではないか。豊かさが何をさすのかということは、戦略の中に盛り込まれていると考える。
- 目指すものが具体的につくるものなのか。また、「私たちがまちをつくる」というところでその主体性の話をメッセージに入れるところからスタートするのか、もう一段前の、「まちに出る」というところの呼びかけが重要なのかを考える必要がある。
- 「つくる」ということは主題の「ウォークブルまちづくりデザイン」の中に含まれていると考える。まちづくりに詳しい人にとってはよいが、外に出ることが難しい人や、まちづくりに関心のない方々にとって自分ごとになるきっかけにならないため、「まち」とか「つくる」という言葉が入らない方がよいと考えている。
- 「和」という言葉が完成形を示す印象というより、「つくる」という言葉が違和感を感じさせているのではないかと感じたため、そこを工夫できれば良いと考える。
- ここで出た視点とそれに対する考え方を明確にしてもらったうえで、事務局と委員長に一任したらどうか。「まちに出る」という要素を入れたり、「つくる」という言葉を除いたりしてもらったらどうか。

その他

- 資料4に基づき、検討のスケジュールが説明された。

閉会